

博士学位論文審査要旨

氏 名	郭夢垚
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第 305 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	清末中国人日本留学生の団体活動と『訳書彙編』
論 文 審 査 委 員	主査 神奈川大学 教授 孫 安 石 副査 神奈川大学 教授 村 井 寛 志 副査 神奈川大学 准教授 松 浦 智 子 副査 明治大学 教授 高 田 幸 男 副査 千葉大学 教授 見 城 悌 治

【論文内容の要旨】

郭夢垚氏から提出された博士学位請求論文「清末中国人日本留学生の団体活動と『訳書彙編』」について、以下、（１）研究の目的、（２）論文の構成と各章の内容の順に述べる。

（１）研究の目的

郭夢垚氏は、1896 年から 1905 年にかけて日本に留学していた中国人留学生が発行した雑誌『訳書彙編』と励志会、そして、これらの組織と関連のある教科書訳輯社、清国留学生会館などの中国人の留学生団体の活動について考察し、20 世紀の初頭に西洋と日本の新しい知識と思想が中国人留学生と雑誌の流通網を媒介し、中国国内に伝播され、民衆の啓蒙を促す役割を果たした過程について検討を加えている。その分析の資料としては、主に雑誌の『訳書彙編』、『開智録』、『訳林』、『清国留学生会館報告』、日本外務省外交史料館の一次史料、東京都立中央図書館の実藤文庫の資料などを用いている。

（２）論文の構成と各章の内容

本論文は序論、本論の全 7 章と結論、そして資料編で構成され、本論の第 I 部「中国人留学生の団体活動」は、励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社、清国留学生会館など、初期の中国人留学生の団体活動について述べている。

第一章では、清末期の中国人留学生の予備学校である日華学堂を考察しながら、日華学堂の中国人留学生の生活と交友関係を究明している。その結果、中国人留学生の活動が日華学堂を中心に展開されたことを、当時の日華学堂の日誌、授業科目、そして、留学生の日記などを分析してまとめている。また、湖江総督張之洞の長孫にあたる張厚琨の学習院大学への留学という事例が、他の一般の留学生とは異なり、特別に優遇されたものであった、ことをも指摘している。

論文の第二章と第三章では、清末の中国人留学生が組織した勵志会、訳書彙編社、教科書訳輯社などの団体の成立とその変遷、そして、構成員などについて再検討を行い、その中心的な役割を果たした構成員がときには重複し、ときにはその人脈を継承するなどの密接な相互関係にあったことを丁寧に分析している。その分析によれば、勵志会は 1899 年の秋に、中国人留学生の親睦団体として成立し、学術交流と演説会を通じて中国人留学生界の思想を啓蒙することを目指した。その後の 1901 年に勵志会から訳書彙編社が独立し、雑誌の『訳書彙編』を編集する出版活動を展開し、さらに 1902 年前半には教科書訳輯社が勵志会の教科書出版の活動を継承することとなる。

第四章では、勵志会、訳書彙編社に続いて、中国人留学生の活動の中心をなす「清国留学生会館」とのこれらの団体との人脈の相関関係について述べている。その結果、清国留学生会館の成立の経緯とその成立過程において勵志会の会員が中心的な役割を果たしたことを明らかに、これら 3 つの中国人留学生組織が密接な人的つながりを持っていることを、寄付金の拠出という財政の方面から、そして、図書や雑誌の寄贈、雑誌の広告や奥付に記録された住所の比較という書誌学の方面から解明している。

第Ⅱ部では、中国人留学生の団体である勵志会が発行した『訳書彙編』の誌面内容の分析に注目している。『訳書彙編』は、中国人留学生が発行した雑誌の「元祖」と称され、中国人留学生によって初めて発行された雑誌であった。1900 年から 1902 年にかけての留学生界において、欧米と日本の知識と思想を中国に輸入したのは、ほかでもなく、『訳書彙編』であったと言ってもよい。それだけでなく、『訳書彙編』は編集、販売、流通等の様々な方面において後から発行された留学生雑誌の手本となり、後の中国人留学生雑誌の発行の指南役を果たした。

第五章は、雑誌『訳書彙編』の創刊の趣旨、誌面構成の変化、資金の問題、販売網の特徴などを明らかにしている。特に雑誌の財政問題という従来の研究では検討されてこなかった点に注目し、雑誌社は、雑誌の販売代金の延納による財政赤字を克服するために、読者の代金延納に対する罰則を強化し、廃刊の危機を乗り越えたことを解明した。

第六章は、『訳書彙編』の記事内容の分析に着目し、同誌とほぼ同時期に発行されている『開智録』（横浜）、『訳林』（杭州）、『勵学訳編』（蘇州）を取り上げ、これら 4 つの雑誌がともに「民智」を開くことを提唱している点に注目している。20 世紀を前後した中国では、啓蒙思想の伝播に伴い、「民智」を開くという目標は中国知識人の共通の認識であった。そこで、「民智」を開くために、中国の知識人と海外の留学生は新聞や雑誌を発行し、欧米と日本の先進的な思想と政治理論を翻訳することに力を入れ、互いの連絡網を築き、その影響を広げようとした。

第七章は、『訳書彙編』、『政法学報』などの留学生雑誌に掲載された記事の中でも「社会主義」に関する記事に注目している。20 世紀初頭、中国では社会主義に関する知識の紹介が盛んになり、社会主義に関連する様々な翻訳と著述活動が行われた。この初期社会主義に関連する記事は、『訳書彙編』、『政法学報』、『浙江潮』などの留学生雑誌にも掲載されていた。この時期、社会主義は、西洋の先進的な知識の一つとして捉えられ、翻訳活動に従事した留学生たちがどれほど意識的に、または主体的に社会主義を理解し、紹介しようとしたのか、については諸説がある。しかし、これらの社会主義に関する知識が、留学生が刊行した雑誌に多く紹介されていることから、中国人留学

生や知識人が、社会主義思想に強い関心を寄せていたことがわかる。中国における社会主義思想の導入の始まりである。

【論文審査の結果の要旨】

郭夢垚氏の論文に対して行われた博士論文口頭試問委員会における審査委員各位の意見、評価などをまとめ、以下に論文審査の結果を述べる。

この論文は、1896年から1905年にかけて日本に留学していた中国人留学生が発行した雑誌『訳書彙編』と励志会、そして、これらの組織と関連のある教科書訳輯社、清国留学生会館などの中国人の留学生団体の活動について考察し、20世紀の初頭に西洋と日本の新しい知識と思想が中国人留学生と雑誌の流通網を媒介し、中国国内に伝播され、民衆の啓蒙を促す役割を果たした過程について検討を加えるという当初の研究目的は、概ね達成できたものと判断される。

例えば、(1) 第一章の日華学堂の分析においては、20世紀初頭の中国人留学生の交友関係を、日華学堂の授業科目、日華学堂の日誌、そして、留学生の日記などを駆使し、その概略を描くことに成功している、

(2) 論文の第二章と第三章では、清末の中国人留学生が組織した励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社の中心的な役割を果たした構成員の人的関係が重複していることを明らかにしている点、

(3) 第四章ではこれら3つの団体につづいて中国人留学生の活動の中心をなす「清国留学生会館」の成立の経緯について分析を加え、その組織構成、財政（寄付金）状況、図書雑誌の所蔵などについて新たな知見を紹介しているが、このような人的繋がり相互関係については従来の先行研究ではまだ解明ができていない部分であった点、

(4) 論文の第五章では、雑誌『訳書彙編』の創刊の趣旨、誌面構成の変化、資金の問題、販売網の特徴などを明らかにしており、第六章は、『訳書彙編』の他に、同時期に発行された『開智録』（横浜）、『訳林』（杭州）、『励学訳編』（蘇州）の雑誌を取り上げ、中国国内と日本の留学生が欧米と日本の先進的な思想と政治理論を翻訳し、互いの連絡網を築き、その影響を広げようとした動きを指摘している点、

(5) 第七章は、『訳書彙編』、『政法学報』などの留学生雑誌に掲載された記事の中で「社会主義」に関する記事に注目し、中国人留学生や知識人の間で、初期社会主義思想に強い関心を寄せていた実態について分析を加えている点、などにおいて従来の先行研究を突破する重要な指摘があったことを高く評価する意見が多かった。

但し、第七章の『訳書彙編』の記事の分析では、「社会主義」のほかにも当時の国会、憲法などの立憲主義に関連する他の近代的な概念についての分析が必要であったのではないかと、中国語の一次資料の引用と日本語翻訳などについて、日本語の表現を見直す必要がある箇所があること、そして、資料編の各種の図表などにおいても本文との関連を明示し、よりわかりやすくしてほしいなどの意見があり、これらは今後の課題として残されている。

以上、郭夢垚氏の博士学位請求論文「清末中国人日本留学生の団体活動と『訳書彙編』」を審査し、本論文が従来の先行研究にはない、多くの有意義な内容を十分に備えていること、当該分野についての十分な知識と高度な研究能力を備えており、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであることを、審査員全員が判定した次第である。